

開会挨拶をする奥山和徳支部長

2016 年度 土を考える会冬 北海道

▶2月4日、5日 (北海道音更町)

年の大豊作となり、 て自分が開発したと言えるようにな 不作続きだった「きたほなみ」が昨 た経歴に触れ、 最近の研究成果について」話した。 プの小林聡氏が「大豆品種の特性と たと述べ、 続いて同試験場研究部豆類グルー 恒例となった参加者に質問を投げ 麦の品種改良にかかわってき 〇×の札で意思表示してもら 会場の笑いを誘 デビュー以来ずっと やっと胸を張っ

豆だ・ビートだ・増収だ!

交換が行なわれた。 に欠かせない豆とビートにスポット 一研修会が開催された。 北海道土を考える会十勝支部冬 参加者33名でさまざまな意見 講師の方々からの情報提供 5日に北海道音更町に 十勝の輪作

温データの変化が示され、初期生育 実例を交えたわかりやすい解説のな て」、十勝農業試験場生産システム 和徳氏が開会挨拶をし、総合司会は が大事なビートの直播にはプラウ耕 の省力化、直播栽培と簡易耕につい 副支部長の佐藤博志氏が務めた。 ループの加藤弘樹氏が講演した。 初めの情報提供は、「てん菜栽培 冒頭に、十勝支部・支部長の奥山 プラウ耕と簡易耕における地

氏の哲学を学んだ。

引

れの場面で、土づくりにかける吉太 緑肥作物の選択に思案した。それぞ

とができ、充実した情報交換会とな を廃耕にした失敗談まで聞き出すこ そうと参加者から質問が飛び出 き続き吉本氏から増収の技を聞き出 その後の情報交換会の場でも、 吉本氏からは過去に2回も小豆

は欠かせないと述べた。

会場からの質問に丁寧に応える吉本博之氏



研修会に参集した十勝エリアの精鋭たちの集合写真



学ぶ深耕の意義」の資料をもとに吉

本氏の話を聞いた。時間をかけて理

現地研修会で作成した「吉本農場に

に吉本氏のヒューマンドキュメンタ

初め

一を上映。

その後、2012年の

恒例となった〇×の札で、参加者と講演者の距離が近くなった

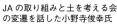
肥の投入、休閑緑肥をスタートし、

こから40m、45mにするために、 想とする土づくりを求めて作土を15

堆

博之氏に聞く増収の技と題し、 うだけでなく、参加者からの質問 情報交換は盛り上がった。 「畑作の匠」

農業経営者 2016年3月号





若手を代表して壇上に上がっ 開会挨拶は細川幹生支部長 た竹原宏太郎氏

東支哥

ŋ が

オ

オ A ホ G I R

覚A 醒R

S

JAところ・

代表理事組合長

2兆円という

|東支部の

多期

消費地から遠く、

2月8日、

▶2月8日、9日 (北海道美幌町)



かりんとうを試食 しゅから進めたグ ループディスカッ ションは各グルー プとも盛り上がっ た しながら進めたグ

細川幹生支部長の挨拶により開会 産地消の取り組みを紹介した。続い ク農協青年部協議会の竹原宏太郎氏 めようというのが今回のテーマで 初日の話題提供は2つ。オホー 谷智博氏が進行役を務めた。 きがちな地域事情を逆手に取 オホーツクエリアの会員と講 ホーツク農業の魅力を再度見 がオホーツク産小麦の地 9日に北海道美幌町で 一研修会が開催され 生産だけに目 初日は、 ッ 度を紹介し、ますます若手や女性の を前に4つのグループに分かれ IFLAG」ブランドの小麦加工品 米」の誕生までのエピソードを紹介。 あるモノとないコト」。 活躍を期待したいと述べた。 性を示した。 小野寺俊幸氏が登壇。 ディスカッションが行なわれた。 名正義氏(上富良野町)の スト庄内の佐藤彰一氏 ホクレンの巨大な事業規模を紹介 3つ目のテーマは いて、「百米」と「何興農社の)が米粉100%のかりんとう「百 オホーツク農業が進むべき方向 農協改革やTPPの話題を交え 最後に常呂町の研修制 「オホーツクに (山形県庄内 まず、 K A M

米シ

|陣ら約30人が参集した。

図られた。 技術の導入など幅広い話題で交流が の情報交換会でも品目拡大や新しい 参加者の年齢層は幅広く、その後

て、

春

氏に加えて、 敗談などに共感を得た様子だった。 やその他の企業との取引における失 カッション。 的な商品へ」 翌2日目の演目は、 (中富良野町)をパネラーに迎え、 農産物加工に挑戦する参加 (株農業技術通信社) と題したパネルディス 佐藤彰一氏、 何天心農場の

北川和也 参加者らは業界内 作物を魅 春名正義 が進



2日目のパネルディスカッションの様子



参加者らの集合写真